

## 新疆のアブダル人

ズルフィア・トルスン  
祖 麗 菲 亜  
(上田道子 訳)

### はじめに

天山山脈周辺からアナトリア半島までの広大な地域には、「アブダル (Abdal)」と呼ばれる集団が生活する。彼らはチュルク系民族の中でも独特の集団である。彼らは千年の長きにわたり、チュルク系部族らと共に暮らしてきた。筆者がここで扱うのは、天山山脈南部に分布するアブダルの人々についてである。

新疆ウイグル自治区の天山山脈南麓に広がるタリム盆地のうち、カシュガル・イエニシェヘル (疏勒), イェンギサル (英潔沙), ヤルカント (沙車), マラルベシ (巴楚), カラカシュ (墨玉), ロプ (洛浦), ケリヤ (于田), クチャ (庫車), ホタン (和田) 市ショルバク (肖爾巴克) 郷, およびロプノール (羅布泊) 付近のウイグル人村落に生活する人々の中に、「アブダル (Abdal)」または「エイヌ (Eynu)」, 「シェイフ (Sheyih)」と呼ばれる集団がいる。彼らは独自の生活習慣を持ち、独特の職業に就き、特殊な言語を使用しており、その生活は外部からは比較的閉ざされている。

アブダルの人々に関する研究は、国際学界の注目するテーマであり、独自の学術的価値や社会的意義を有する。19世紀末から20世紀初頭にかけて、F. Grenard, P. Pelliot, Albert von Le Coq, Hildon Kaarlo, G. Raquette, Aurel Stein などの外国人探検家が、この集団に関する記録を残している。1980～90年代にかけて、オーストリア科学アカデミーの Ö. Ladstater, A. Tietze の両氏、及び東京大学大学院人文社会系研究科言語学研究室の林徹氏が、この集団について調査を行い、著作を発表している。

1970年代以降、中国のハーシム・トゥルディ、趙相如、ミルスルタン・オスマン、ムテリプ・スドック、アブレット・アッバス、サービト・ローズィー、ターヒルジャン、王建新、アリ・グプルらの各氏も、それぞれの角度からアブダル集落について検討している。しかし、彼らの研究は主に言語分野に集中している。そこで筆者は先達各位の研究に基づいて、筆者が2001年、2005年にホタンやウルムチ在住のアブダル人に行った取材を基に、彼らの名称、言葉、伝統的に従事してきた職業、風俗習慣などについて、系統的な研究を行った。

## I アブダル人の名称

アブダル人の名称について明確に記載した文献はない。この問題について、研究者の見方は一致しておらず、主な説としては次の幾つかが挙げられる。

筆者は、2001年にカシュガル、ホタンで現地調査を行った。また、2005年にウルムチでアブダル人チュマ・アブドゥゲリ・チョカ氏から聞き取り調査を行い、及び同年ホタンでも現地調査を行った。この中で、アブダル人に伝わる、2種類の伝説を聞いた。また、これらの伝説はアリ・グブル氏の論文でも紹介されている。このうち、イェニシエヘル県シェイフ村に生活するアブダル人の中には、このような言い伝えがある。

今から1千年前、アブダルの人々はサイド・オブル・パツタリ・ガズィ (Said Obul Pattali Ghazi, スルタン・ムラト・バフシ・アタとも) に率いられ、ダフビド (Dahbid) からカシュガルに移り住み、エリ・アルスラン・ハンがホタンの異教徒を討伐するために起こしたジハードに参加した。この戦役の中で、サイド・オブル・パツタリ・ガズィは重傷を負い、7戸の親戚が彼をカシュガルへ護送した。その途中、大河に道をさえぎられた。同行者が大河を渡るために筏を準備している間に、思いがけずサイド・オブル・パツタリ・ガズィは症状が悪化し、死亡した。彼の遺体はその場に埋葬され、墓を守るために同行者はこの地に住むようになった。当時、国全体が戦争に明け暮れ、彼らを顧みる余裕がなかったため、彼らは物乞いをして生きていかざるを得なくなった。後に、次第に前線から退いてきた負傷者が増え、人口が年々増加していった。この地には至るところが川岸になっているが、地勢が高いため河水を使った農耕は難しい(鎮には現在も古い川筋跡の遺跡が残る)。後の国王がこの地に水を引いたために、Paynap (水の下流、の意) と名づけられ、水路はHaneriq と呼ばれるようになった。現在のHaneriqの地名はここに由来するとされる。サイド・オブル・パツタリ・ガズィの元同行者たちは毎年、かゆを作ってマザールの参拝に訪れた貧しいものたちに分け与えた。後に、多数のウイグル人がこの地に移り住み、果樹園を営むようになったが、Paynapという名前は残った。現地にウイグル人が増えるに連れ、ウイグル人の居住区はChong Paynap (大きなパイナップ) と呼ばれるようになり、サイド・オブル・パツタリ・ガズィらの後裔が暮らす地区はシェイフ・パイナップと呼ばれて区別された。これにより、「シェイフ・パイナップ」が新たな地名になっていった [アリ・グブル 2006]。

ホタン市ショルバグ郷ヘニケント村のアブダル人の間にも、よく似た伝説がある。ここにもマザールがあり、アブダル人らはマザールの周囲に集まり住んでいる。

ロプ (Lop) 県ブヤ (Buya) 郷タメギル (Tameghil) 村出身のアブダル人であるチュマ・アブドゥゲリ・チョバは、新疆教育出版社に勤務する。チュマ氏が父親から聞いた話によれば、祖先に関する伝説は上に紹介したものとはやや異なる。チュマ氏によれば、カラハン王朝期、王はホタンの異教徒を攻めるため、アッバース朝に救援を求めたところ、サイド・オブル・パツタリ・ガズィの率いる志願兵3,000人が送られた。戦争終結後、2,000人が帰国し

たが、残り1,000人がこの地で暮らすようになった。彼らはスンナ派のムスリムであるもの、現在に至るまで周囲の住民から排斥されている。何故なら、彼らが「アリーを認めないから」という。ホタン方言とタメギル方言の間にはやや異なるところがあり、タメギル方言はウイグル文章語に使用されている言語に近い。ホタン方言ではRの発音は弱くなるが、タメギル方言ではそういった特徴はない。この点については、筆者もまだ未検証のままである。

10世紀のSeid Pattali Ghaziの伝説については、根拠となる裏付けはない。カシュガルのパイナブのシェイフ村やホタン地区のタメギル、ゲウォズは10世紀から現地に住んでいたが、彼らの人口は少なく、その後の10世紀の間にだんだんと現地のウイグル族の集団にとけ込んでいった。このため、何倍もの人口に上るウイグル族に囲まれて、10世紀間の長きにわたり存続し続けるとは考えにくい。一部の学者は、アブダル人たちがイラン・イラク方面から来たと考え、タメギル村のAsqilan, Kufe, Guwezといった地名を根拠に挙げている。しかし、十分な根拠はなく、断定できないと筆者は考える。このほか、Gewozのアブダル人によれば、かつてイランから多数の人が訪れてこの地に住み、Jalalidin Bagdatもそのうちの一人（彼のマザールは今もGewoz村に残る）という。彼はGewozでTutun Begi（トゥトゥン侯）になった。このため、現地の人々の言葉にはペルシャ語の要素が含まれるという。

ムテリッパ・スドック氏は、現地のアブダル人を「シェイフ（Sheyih）」と呼んでいる。スドック氏によれば、「アブダル（Abdal）」という言葉の由来は、「水を止める者」、「水を押し止めた者」という意味のペルシャ語であり、この集団は当初、イラン、アフガニスタン一帯のある部族に暮らしていた。この部族は5～6世紀に強大な帝国を打ち立て、その後、突厥の攻撃により壊走してパミール高原周辺に分散した。当時、彼らの一派はダフビド（Dahbid）からカシュガルに逃れ、遊牧生活を送り、その首領であるサイド・オブル・パッタリ・ガズィはウストラ・チャクマク・マザール（Ustra chaqmaq mazar）に一時滞在した後、960年に7戸を率いて現在の居住地であるパイナブ（Paynap）へ移ったとされる[ムテリッパ・スドック 1988: 90-91]。

マフムド・カシュガリの『トルコ語大辞典』（ウイグル語版）によれば [I: 前書き, 3, 29, 41; III: 164], 彼らにはこのほかケンチェク人（Kençekler）という呼称があった可能性<sup>1)</sup>がある。『トルコ語大辞典』の記載から、筆者はこのケンチェク人こそがアブダルであ

1) ・カラハン王朝の領域内には soghdaqar (ソグド人) や kençekler (ケンチェク人), 及びイラン系の各方言を話す人々が暮らしている。言葉を取れば最も分かりやすいが、正確に言えば、1種の言語のみを操る人はペルシャ人や都市の人との往来のない人である。2種の言語を操る人は、都市の人と交流するに当たり、操る言葉を一変させる。soghdaqar, kençekler, arghuler ……はすなわち、二種類の言語を使用する部族である。

・ケンチェク人 (kençekler) はカシュガルのある農村に暮らす人々であり、彼らには別の言語があり、カシュガルにはケンチェクの言葉を話す農村がある。↗

ると考える。

アブレット・アッバス氏も同様の見方である。アッバス氏は「アブダルという言葉の語源は、ペルシャ語の中の“水を押し止めた者”という言葉から来ており、ある伝説によれば、偉大なるイマームたち (Hezriti Imamlar) がケルバラ (Kerbala) の戦いで水を飲もうとしたとき、ユーフラテス川の水を止めた人々が、アブダル人と呼ばれたという」[アブレット・アッバス 1997: 76] と述べている。

アブダルにはもう一つ「エイヌ (Eynu)」という呼称がある。「エイヌ」という名称はホタン、その中でも主にロブ県ブヤ (布亜) 郷タメギル (塔米格勒) 村のアブダル人の間で使用される。趙相如氏、ハーシム・トゥルディ氏らの『新疆艾努人的言語 (新疆エイヌ人の言語)』[趙相如, ハーシム・トゥルディ 1982: 259], 『艾努語和艾努語中的数詞 (エイヌ語とエイヌ語における数詞)』[趙相如, ハーシム・トゥルディ 1985: 123], 林徹氏らの『謝依赫勒詞匯 (シェイフの語彙)』[林ほか1999], Ö. Ladstätter 及び A. Tietze 両氏の *Die Abdal (Aynu) in Xinjiang* (「エイヌ」とは彼らの自称であり、「貧困者」, 「乞食」または「学問のある者」, 「マウラー」といった意味であると指摘) [Ladstätter & Tietze 1994: 90] といった論文や著作においては、「エイヌ」と「アブダル」の語が同じように使われているが、「エイヌ」の語源や意味に対する説明はされていない。

シェリフジャン・カースム (Sherifjan Qasim) 氏は、Eynu の語のうち Ey は現代ウイグル語の u または awu (いずれも「あれ、あれら」の意) に当たる指示代名詞であり、現代ウイグル語の kepe (萱葺きの庵), chider (テント), satma (掘って立て小屋), あるいは yat (外), yochun adem (よそ者) というニュアンスを含んでいるとする。また、ホタンの言葉における「アブダル」という語には次の3つの意味があるとする。

- ①割礼師：伝説ではアブダル人がホタンに割礼を持ち込んだとされており、ホタンの人々は「アブダル」を割礼者の意味と捉えている。
- ②ダルヴィシュ (Dervish)：専らマザール・マシャイフ (Mazar mashayih) に住む人々も、「アブダル」(またはダルヴィシュ) と呼ばれる。
- ③サヒル (Sahil)：ホタンの人々は時にアブダルをサヒル (Sahillar) と呼ぶ。つまりサパイ (Sapayi, 打楽器の一種) を弾き、ホルジュン (Horjun: 馬の背に掛ける布袋, 左右両側にポケットがある) を背負って各地を渡り歩き、物乞いをして生活する人を指す [Sherifjan Qasim 2005: 30]。

牛汝極氏主編の『阿爾泰文明与人文西域 (アルタイ文明と人文としての西域)』は次のよ

・ホタンやケンチェクの言語には子音“h”があるが、これらはチュルク系の言葉にはなく、彼らは後から突厥人の旧領にやってきた人と考えられる。  
 ・パイナプ (Paynap) はカシュガル周辺では唯一、ケンチェクの言葉が使われている農村であり、シェイフ (sheyih) はつまりケンチェク人である。

うに記している。

現在、タリム盆地南西部のカシュガル、ホタン、ヤルカント、カシュガル・イエニシェヘル、カラカシュ、クチャなどの地には、小さな部族集団が分布し、彼らは「エイヌ」と自称し、自らの祖先はイランから来たと称する。現地のウイグル人は、彼らを「アブダル (Abdal)」と呼び、その意は「物乞いする者」である。我々は彼らの祖先をエフタル (Eftalitlar, 嘸噠) ではないかと考える。現代中国語における「嘸噠」の発音は Yada であるが、古代の発音は Abdal に近い。嘸噠はまた「白匈奴」とも呼ばれる。[牛汝極 2003: 33]

段連勤氏は、Percy Sykes 氏 (英) の *A History of Afghanistan* および William Montgomery McGovern (米) の *The Early Empires of Central Asia* などを引用し、次のように述べる。

彼ら (エフタル) は遊牧民族であり、北朝人は彼らをアブダル——嘸噠 (Eftalit) と呼び、南朝やホラズムの人 (Harezimliklar) は「滑」と呼び、ペルシャ人やアラブ人は Haytal と呼んだ。東ローマ人は、彼らがフン族 (匈奴) と雑居していてすでに言語の融合や混血が見られたこと、及び彼らの肌に光沢があり、白かったことから「白いフン族」と呼んだ。[段連勤 1996: 480, 481]

『ウイグル語详解辞典』は Abdal という語を「カラングル (Kalender), 物乞い, 乞食」と解説している [1]。また Eynu という語を「だます者, 偽善者, 偽りの君子, 詐欺師」と解説している [99]。

モラ・ムサ・サイラミ (Molla Musa Sayrami) は *Tarihi Aminiye* の中で、ジャーミーの *Nafahāt al-uns* を引用している。

万能にして無欠、万能のなぞを解きたまう神の御園には、高貴とみなされる者が 300 人在る。彼らは Axyar と称され、彼らのうち 40 人は Abdal と呼ばれる。その他に 7 人が Abrar と呼ばれ、4 人が Avtar と呼ばれ、3 人が Naqba, 1 人が Qutb, 1 人が Ghavs と呼ばれる。彼らは互いに知り合いであり、何事も彼らは互いに助け合うとともに、相手の許しを得なければならない。[*Tarihi Aminiye*: 360]

*Tarama Sözlüğü* では、Abdal という語を「カラングル, ダルヴィシュ (Dervish)」と解説している [1]。

*Türkçe Okyanus* では Abdal という語を「アフガニスタン北部の Aqtele (ビザンチン側の資料には Epthalites と記載) に居住するチュルク系部族の名、及び同部族に属する人々を指す」と解説している [2]。

『トルコ語・ウイグル語辞典』は Abdal を ①アフガニスタン北部のあるチュルク系部族 ②アナトリアの移民 ③古い時代にダルヴィシュにつけられた名——と解説している [Momin Abdulla 1989: 1]。

Zeki Velidi Togan 氏は著書 *Bugünkü Türkili (Türkistan) ve Yakın Tarihi* の中で、Abdal は Eski Yabdal, Heftalit (古代のエフタル) であるとしている [Togan 1947: 593]。

トルコの学者である Ali Duran Gülçiçek 氏は著作 “Abdallar” の中で、シャー・ハター

イー (Şah Hatayi) の言葉の「聖者を友とするものは, Ahiler (古代チュルクの習俗に従う勇士) たち, Gazilar たち, そして Abdal たちである」という部分を引用し, 次のように解釈している。

アブダルという言葉の由来は, アラビア語の中の badal であり, 「証人」, 「代表」, 「神性」といった意味から考えると, 彼らは禁欲的に苦行を行う者であり, 潜在的な威力を有する神がかり的な人や男性らであり, スーフィズム信仰における階梯の一つである。民間では彼らは Budala (狂人) や Derviş, Ermiş (男子) と呼ぶ。また, Kalander (乞食) や光明と同じ意味でも使われ, その信仰によれば約 40 人存在する Abdal たちは, 聖なる階梯の 5 番目に序列されている。スーフィズムの教義では, 1 人の Kutup または Gars, 2 人の al-İmaman, 4 人の al-Awtad (イスラムの信仰に帰順した者) または al-U mud, 7 人の al-Afrad または狂人, そして 40 人の Abdal がいるとされる。続く 6 番目の階梯に当たるのは 60 人の Nüceba (nakib) (高貴な人), 300 人の Nukaba, 500 人の Aşa'ib であり, さらに Hukama あるいは Mufradan が続く。このほか, アラウィー派 (Alewi-Bektaş) の Derviş や放浪する神がかり的な人物にも Abdal という語を使用する。例えば Abdal Musa, Kaygusuz Abdal, PirSultan Abdal, Teslim Abdal といった用法がある。セルジューク期 (12～13 世紀) に, ホラーサーン地方からアナトリアへ移動した人々は, ババ (Babaili) 派かベクタシュ (Bektaş) 派に属しており, オスマン帝国の建国に大きく貢献したホラーサーンの男子らも Abdal と呼ばれる。<sup>2)</sup>

上述の記述に基づき, Abdal という語の由来についての説を, 次の 5 種類にまとめる。

- (1) シェイフ人——アブダルという語は, カシュガル地区疏勒県に生活する人々の間では, 「シェイフ人」という別称を持つ。彼らは比較的辺鄙な村に集中し, 一つのマザールの周りに定住している。シェイフの村の現在の名称は, その村の中心にあるマザール, 及びそのマザールのシェイフと関連がある。ホタンのアブダルの人々についても同様である。このほか, アブダルという語には giwozluqlar (ギオズの人々), tamighelliqlar (タミゲルの人々) という別称もある。「ギウォズ」とはホタン市ショルバグ郷ヘニセント村の旧称であるとされる。このほか, 「タメギルの人々」という呼び方も, 現地のウイグル族や一部の学者のアブダル人に対する呼び方で, その居住地名の特色によって生まれた呼称である。筆者はこの呼び方について, この集団が周囲に居住していたマザール, または彼らの居住していた場所に由来する呼称と考える。例えば, シェイフ村, ギウォズ村, タミゲル村といった例がある。『トルコ語大辞典』ウイグル語版では Kençekler という語を「或いは Sheyhler (シェイフ) のことかもしれない」と解説している。これら 2 例のほかにも, 林徹氏らによる共著『謝依赫勒詞匯 (シェイフの語彙)』にも, 同名称が引用されている。

2) Ali Duran Gülçiçek, “Abdallar” [www.aleviakademisi.de/site/content/view/115].

- (2) アブダルという詞はペルシャ語に由来し、「水を止めるもの」、「水を押し止める者」と言う意味がある。この説を支持する学者は、ペルシャ語を根拠としており、Abdalのabはペルシャ語の「水」、dalは「押し止める」の意であるとしている。
- (3) 「エイヌ」という語は中国南朝やホラズム人(Harazimlikler)に「滑」と呼ばれたことから来ている。「滑」は中国語においては「ずる賢い」の意味である。筆者の現地調査によって、「エイヌ」の語にも「聡明、変化に長けた者」という意味が含まれることが分かった。
- (4) アブダルという語の由来が「嘸噠(エフタル)人」であるとする説を取る学者は、「嘸噠」がアラビア語におけるHaital, Hayatila, ペルシャ語におけるHeftal, Hetalなどに当たると考えている。また、西洋人はEpthalites, 東ローマ人はAqhon, 漢籍では「嘸噠」と呼んだとしている。これらの呼び名の発音はアブダルに非常に近く、しかもエフタルはかつて新疆南部を統治した時期があった。

筆者は、アブダルの語はEptal, Epthalitesが変化して生じたものと考え。なぜなら、エフタルは本来、大月氏、匈奴、西丁零、胡といったチュルク系部族が長い年月の間に融合し、形成されたからである。エフタルは5世紀初頭に東・北アルタイ地方から中央アジアやアフガニスタン北部へと西遷し、そこでエフタル帝国を打ちたてた。また、ホタンやカシュガルなどを含む広大な地域を統治したが、567年、突厥とササン朝の連合攻撃により滅亡した。

現在のチャクリク(若然)県ミラン(米然)村北部には、アブダルという地名がある。エフタルが元々タリム盆地に居住していた可能性もあり、或いはエフタル帝国の東方拡大と征服の後、現地にエフタルの人々が残った可能性もある。

- (5) アブダルという語の由来はアラビア語であり、「変化する、変化させる」の意味を持ち、或いは「代表」、「証人」といったスーフィズム信仰の等級を表す呼称である。それはスーフィズム信仰におけるある種の神秘集団に与えられる名称である。Abdalの語はアラビア語のbadalが変化して生まれたものである。神学的な角度から見ると、アブダルという名称はスーフィズム信仰において、アッラーから認められた者であり、世界全体は彼らを仲介人として存続するとされる。彼らは常人には会得することのできない神がかり的な力や感覚を持ち、自らの身体を復活させたり変化させたりすることのできる神秘的な集団であると見なされている。彼らはこの世におけるアッラーの代理人または証人であり、スーフィーらがさまざまな「階梯」や「状態」を経て、客観的にアッラーと交流し、合一し、最終的に精神の道のりの終点にたどり着くための条件を有した者と考えられている。

要するに、アブダルとは、この部族の古い名称であり、そこには意味の変異は起きていない。しかし、その後の年月においてアブダルという語に意味の変化が生じ、いつのころからかアブダルが割礼者、乞食、Dervish, Kalender, Ask, Divane, 占い師などの意に変化し、またアブダルという言葉に差別的なニュアンスが含まれるようになった。

以上から分かるとおり、アブダルとはチュルク系部族の人々である。今日のウイグル族は、長い歴史の大河の中で非チュルク系部族がチュルク系部族に合流して形成された民族であり、エフタルもこの流れの中に含まれている。筆者は、この集団の独自性を尊重する学界の見地から、彼らを「アブダル人」と呼ぶ。なぜなら、アブダルという名称はウイグル語において、すでに世々代々にわたり、彼らの集団や人の名称として使われてきたからである。ただ、彼らがウイグル族の一集団であり、以前からこの土地に生活していた点は、疑う余地がない。新疆のアブダルたちは「ウイグル人」と名乗り、アフガニスタンのアブダルたちは「アフガニスタン人」と名乗り、アゼルバイジャンのアブダルたちは「アゼルバイジャン人」と名乗り、アナトリアのアブダルたちは「トルコ人」と名乗る。歴史の推移がこの集団に特殊な命運をもたらしたために、現在のアブダルが形成されたのだと筆者は考える。

アブレット・アッバス氏は前掲の著書で「シェイフ人は容貌、言語や文字、宗教的信仰、風俗習慣などの面ではウイグル族と同様であり、また家屋建築、内装、服装、装飾品、飲食の面でもウイグル族と何も区別はない」と述べている。

このほか、アラブのイスラム帝国の衰弱に伴い、後期のカリフらは強い民族を後ろ盾に政権を維持し、イスラム帝国の声望を守ろうと考えた。カリフらはまずホラーサーン人、次いでメルヴ人で軍隊を編成した。このため、チュルク系のオグズ・トルクマンの民らがイラク、シリア、小アジア方面に大量に移動することになり、アラブ・イスラム帝国西部の住民構成にも変化が生じ始めた。帝国西部のオグズ・トルクマンはセルジューク朝を打ちたて、イスラム帝国の政治的命脈に大きな影響を与え、カリフらの実権は次第にオグズ・トルクマンらの手中に移っていった。チュルク部族の移動に伴い、その中の一角を担ったアブダルの人々も、帝国の各地に移動していったとみられる。

トルコやアゼルバイジャン、アフガニスタン、イランのアブダル人であれ、新疆のアブダル人であれ、彼らの生活習慣や居住習慣には鮮明な特徴がある。対人関係における神秘性、封鎖性や厭世主義などが、この点を十分に説明している。

## II アブダル人の「言語」

F. Grenard 氏は 1893 年に中央アジアを訪れた際、ケリヤにてアブダル人の家庭 50 戸を訪れたほか、チャルチャン（且末）でも 7～8 戸のアブダル人家庭を訪れ、彼らに関する研究を行っている。Grenard 氏はこの集団の言語は周囲のチュルク語話者らの言葉と大差ないものの、独自の言語的特色があり、ペルシャ語の要素を含んでいることから、彼らを「アブダル人」と呼んでいる。アブダル人らは「エイヌ (Eynu, Heynu)」と自称している。彼らは土地を持たず、多くは芦細工を生業としている。自らムスリムと称するが、周囲のイスラム教徒らとは往来がなく、通婚したことも全くないという [Grenard 1898: 308-309]。

P. Pelliot 氏はその著作“Les Abdal de Painap”の中で、「カシュガルのチュルク人たち

によれば、これらアブダル人らはチュルク語を操るムスリムであり、アブダル人は別の部族・集団という訳ではなく、単に現地（の人々）とは異なる、放浪するダルヴィシュなのである」と述べている [Pelliot 1907: 115]。

Pelliot 氏は Grenard 氏の研究を土台に、アブダル人の名称について独自の解釈を示し、「アブダル」には別の意味があるとしている。Pelliot 氏はアブダル人を訪問した後、パイナップのアブダル人はチャルチャンやホタンのアブダル人とは異なることに気づいた。氏によれば、パイナップの 400 戸のアブダル人たちは、現地のチュルク人たちと密接な関わりを持ち、通婚することもあった。また、この地のアブダル人たちはチュルク人向けのサービス業に従事するか、一部は農耕、商業にも携わっている。こうした移動するアブダル人たちは、カシュガルのチュルク言語に精通しているほか、ペルシャ語、キルギス語、ヒンディー語、キプチャク語、アラブ語にも通じており、また自らの祖先は太古の時代にイランやイラク・ダルバンド (Darband) 地方からやってきたとしている。ただし、Pelliot 氏は他の地方のアブダル人について研究したわけではなく、ただカシュガル・イエニシェヘル県タズグン (Tazghun) のアブダル人 5 戸を訪問したのみだった。Pelliot 氏と Grenard 氏は、アブダル人らが「エイヌ (Eynu)」または「ギラマン (Ghilaman)」と自称し、彼らの操る言語は多くがペルシャ語の語彙から成っているという点で、一致した認識を示している。

Albert von Le Coq 氏は 1906 年にホタンを訪れ、現地のアフガニスタン商人からアブダル人の或る集団について聞き、リザモラ (Riza Molla) をリーダーとする、白いブラウスと長いひげで知られるアブダル人の集落を訪ねた。後に、その著書の中で次のように記している。

清朝は新疆を併合した後、40 戸の「アブダル人」をカラカシュ川付近のタメギル (Tameghil) に落ち着かせた。これら移動する「アブダル人」らは、ふるいや匙の職人、掃除人、大道芸を生業とし、自らムスリムと称しながらも自らの伝統的習俗を保っている。しかし、彼らはチュルク人やアフガニスタン及びインドのムスリムらとの往来は少なく、通婚は内部に限られ、喫煙やウサギ、ブタなど不浄とされる動物をタブー視しない。このため、現地の人々は彼らを真のムスリムではないと見ている [Le Coq 1912: 22]。

Le Coq 氏の研究によれば、この集団と現地住民にはさほど大きな違いがなく、その言語にはチュルク語、ペルシャ語、アラビア語が混在している。彼らはホタンの他のアブダル人のように「エイヌ」とは自称せず、「アブダル人」と自称している。Le Coq 氏は 1901 年、ベルリン東洋学委員会の派遣により古城の視察のためにトルコのイスラヒヤ (Islahiye) 付近のゼンジルリク (Zincirlik) 村を訪れたが、その際一行はモサ (Mosa) とその息子のアリ (Ali) という 2 人のアブダル人に会った。2 人はトルコ語、クルド語のほかに独自の言葉も操っていた。Islahiye 付近の Karaburchlu 村から移り住んできたこれらアブダル人らに対し、トルコ人は彼らを Abdal と、クルド人は Gevende または Gavende と呼ぶ。彼ら自身は Teberchi と自称する。彼らは貧しく、婚姻はグループ内で行う。ムスリムではある

が、その教えにはタブーは含まれない。

Le Coq 氏は Zircirlik のアブダル人の言葉を整理したが、自らは先に戻る必要が会ったため、作業を W. Foy 氏に託した。Foy 氏は自らの著作で、Teberchi のアブダル人がチュルク系の流浪民の一部であり、独自の言語を持つと紹介している。その言語は、文の構造や動詞はチュルク語で、語句の大部分がチュルク語であるが、ジプシーの言葉やアナトリアでは現在使われていない語句があるという。

Le Coq 氏は、こうした言葉について、Urumiye 湖付近の Hellac 村や Teberchi, Domalar 及び西イランの Karaci と呼ばれるジプシーの方言と共通点があると指摘する [Le Coq 1912:221]。オーストラリア人の Ö. Ladstätter と A. Tietze の両氏は 1983 年と 1986 年の 2 回にわたりアブダルの集落を調査するとともに、カシュガル、ホタンの一部研究者と交流し、大量の資料を収集し、*Die Abdal (Aynu) in Xinjiang* を出版した。同書は、アブダル人の言語について、次のような見方を記している。

- (1) アブダル人は 2 言語を操る集団ではなく、その語彙構造、文法構造ともにウイグル語であり、語形変化もウイグル語の変化と同じである。ただ、他者との交流においては、他の集団との区別のために、他とは異なる語彙を使用しており、アラブ語、ペルシャ語、ロシア語、モンゴル語からの借用語が混用されている。「エイヌ人」とはウイグル族の分派であり、独自の言語体系としての考察はなされておらず、彼らは故意にある種の言葉を改変しているのである。
- (2) イラン語からの借用語がその基礎になっている。現代ペルシャ語のほか少量のタジク語など東イラン語の成文が語彙に見られ、アブダル人は自らをイランから駆逐された集団であると考えている
- (3) アブダル人の語彙は、現代ペルシャ語からの借用語を中心に、数、親族の呼び方、物品、行為を示す言葉は、その形式や意味において現代ウイグル語とは大きな差がある。
- (4) イラン語及びサリコル地方のタジク語に近く、その祖先は最も早くから新疆にイスラム教を伝えたと言われる。しかし、あくまで伝説であり、その信憑性を確認することはできないが、アブダル人の言語には古代イラン語の成分が見られず、300 年前に新疆に移ってきた集団である可能性もある。
- (5) アブダル人とジプシーとの関連性が考えられる。アブダル人を「東アジアのジプシー」と呼ぶ者もいる。「エイヌ人」が東イランから来たのであれば、その言語は東イラン語であるはずである。アブダル人とジプシー、イラン・イサル族と生活習俗が似通っており、ウズベキスタンなどアジア各地のジプシーにも近い。アブダル人が新疆に移った後、男の子の包皮を切除する職業に従事しているほか、占い、妖術などの職業に就いているケースもあり、ジプシーの分派であるか、あるいは乞食を生業とする集団かもしれない。彼らの自称である「エイヌ」は、「貧乏人」、「乞食」、「知識の奥深い人」、「マウラー」といった意味がある。しかし矛盾点として、彼らの使用している言葉はペルシャ語であり、ジプ

シーの使用するアラビア語ではない。アブダル人の言語にあるアラビア系語彙とされるものの一部はペルシャ語であるほか、これとは別に民間由来の語彙もありサカ語、トカラ語といったイラン系の語彙も留めている可能性がある。

(6) アフガニスタン西部のダルディク語に近く、アブダル人の言葉は現代ペルシャ語が基になっており、伝説に反映されている……(中略)……アブダル人の言語は比較的若い言葉である [Ladstätter & Tietze 1994: 90-91]。

カザフの学者 Choqan Velihanof 氏は、*Alte Sheher Haterisi* (六城記) という著書の中で、カシュガル、ヤルカント、ホタンなどの地は複雑な起源を持っており、ブハラ、バダフシャン、カシミール、カブールのアヴガン (Avgan) などの地から移り住んだ住民がおり、また外国人と現地女性との間に生まれた人も見られると指摘する [Velihanof 2001: 45-46]。

ムハメット・アティフ (Muhemmet Atif) 氏は著書 *Kashgar Tarihi* (カシュガル史) の中の「カシュガルの住民 (Kashgar Qitesi Ahalisi)」の部分でこう述べる。「……このほかトルキスタン、ヒンディスタン、アフガニスタンから多数の人が訪れ、先住の人々と混血して現地住民が形成された」 [Atif 1998: 8]。

上述の資料から、アブダル人たちがさまざまな民族と接触していたことが分かる。こうした接触の過程を経て、アブダルたちの言葉の中に多数のペルシャ語の要素が浸透したのだと筆者は考える。

Mirza Muhemmet Heyder の *Tarihi Rashidi* によれば、カシュガル、トルファン の周囲にモンゴル人 3 万人が残ったという記載がある [Tarihi Rashidi: 376]。しかし 300 年後の現在、すでに自らの語彙を忘れてしまい、わずかに北方方言の音声的特徴を残すのみである [Osmanof 1990: 132, 145]。この例に鑑みれば、アブダルが固有の言語を失ったとしても不思議ではない。

これまでのところ、エイヌ語はペルシャ語の語彙、ウイグル語の文法が融合した混合語であると考えられている。しかし、シェイフ村で収集した資料によると、エイヌ語と標準的なウイグル語は音位、形態、文構造では似通っており、単に語彙が異なるのみである。エイヌ語特有の語彙について分析したところ、ウイグル語の外来語との共通性をはっきりと見て取れる。このため、エイヌ語と標準ウイグル語の根本的な違いとは、エイヌ語に使われている外来語彙がより多いことである。エイヌ語をある種の「秘密保持言語」と考えれば、エイヌ語に大量の外来語が採用されているのは、部外者に話を立ち聞きされたくないためということになる。

私たちが比較に用いたのは標準的なウイグルのみであり、カシュガルやイエニシェヘル の言葉と彼らの言葉を比較すれば、その差はさらに縮まるであろう。

### Ⅲ アブダル人の伝統的な生計

新疆のアブダル人たちは主にカシュガル・イェニシェヘル県のハンエリク (Han Eriq) 鎮パイナプ村, ヤルカント, マラルベシ, ロプ県ボヤ (Buya) 村, ホタン市ショルバグ (Shorbagh) 郷ヘニケント (Heni) 村, ケリヤなどの地に分布する。このほか, イェンギサル, ペイジワト, カシュガル都市部, アトシュ, アクス, クチャ, パイ, ウルムチ, ミチュアン, ボルタラなどの地にもアブダル人が暮らしている。

パイナプ村のアブダル人は1,570戸を数え, 55年には全6クラスの小学校が設立された。教諭は各クラス1人ずつで, 全校生徒は190人である。

パイナプという言葉は、『ウイグル語詳解辞典』の中で「①水の上流 ②水の上がって来にくい土地。水の上がりにくい土地」と解説されている [673]。

村には870畝 (1畝は1/15 ha) の土地があり, 80戸余りが薬の材料, 30戸余りが菜種の栽培に携わり, 15%が乞食である。もっぱら割礼に従事している家は100戸ある。村で初めて4年制の大学を卒業したユスプジャン・メモ氏は, 03年にカシュガル師範学院を卒業している。

Giwoz (Hine) 村はホタン市西部のホタン市ショルバグ郷内の村であり, 市から4キロほどの場所に位置する。318戸1,634人が暮らし, 先祖の代から割礼に従事してきた家は3戸, 商売を営む家は212戸で29種の職業が営まれている。主な職業は木材取引, コック, 商業, 伝統医術などである。中学生は111人, 小学生は372人である。

現地の人によれば, Giwozという言葉の語源はGirbozであり, その意味は「新たに開墾された土地」である。その後, この言葉は変化して差別的な「乞食」のニュアンスを持つようになった。現在, 同村ではHeniという言葉が併用されているが, 現地の人によればこの語の意は「皇帝の土地 (Hanlik Yer)」で, 彼らの祖先がここで開墾を行い, 耕作を始めたという。また, 彼らはマザールを囲むように住んでいる。

村民の説明によれば, 彼らの祖先の伝説から分析すると, この村の名称であるHeniは, カラハン朝時代の土地制度であるHeni Yerler制との関係も考えられる。

『ウイグルの歴史』には「Heni Yerler——カラハン朝が外部の土地の征服後, 敵方の王室や貴族らの土地を没収してHanliq Yerlerと呼んだ。また, 王室直轄の土地のこともHanliq Yerlerと呼ばれた」とある [184]。

カラハン朝がオドゥン国 (Odun Hanliqi 于闐) を征服したとき, 戦役の功労者に土地を与え, その後の世紀においてもこの土地では皇室から与えられた地名が引き続き使用されたが, 同時に自らの生活方式によりGiwozとも称したとも考えられよう。

タメギル (Tameghil) ——ロプ県ボヤの役所から北2.25キロメートルの平原に位置する。人口は4,500人で, 中学校には55人, 小学校には65人の生徒がいる。1984年に新疆大学中

文系（国文科に相当）を卒業したジュメ・アブドゥゲニ・チョッカ（Jume Abdugheni Choqa）氏が、同村の4年制大学卒業生の第1号である。タメギルの人にはそれぞれ綽名があり、広く使用されている。彼らの綽名は姓のように代々伝えられている。たとえば choqa, zenjir, mozay などがこれに当たる。主に絨毯の生産に従事しているほか、Teweplik（伝統医術）や薬草の取引にも携わる。先祖の代からの生業（乞食）を営むものも多い。タメギルの名称の由来には、二つの説がある。

(1) アブダル人は「タメギル (Tameghil)」は Tamghil であった筈だと説明する。これについては、以下のような伝説がある。「アブダル人の祖先がこの地に移って以来、閉ざされた状態での暮らしを強いられた。不平等な待遇に、彼らは統治者に対して不満を抱いていた。ある統治期に、アブダル人らは立ち上がって抵抗したが、制圧され、多くの人が殺され、死を免れたものも顔に文字を刻まれた（焼印を押された）上で異郷へ追放され、“顔に焼印を押された人”と呼ばれた。このため、アブダル人たちがこの村に移った後、この地も“顔に焼印を押す土地”と呼ばれ、その略称として“Tameghil”となった。」

(2) 筆者はチョカ氏からの聞き取り調査で、Tameghil は羊の囲いだという説明を聞いた。この説は、現地政府（ロブ県）が現地の歴史を紹介するために発行した小冊子でも紹介されている。それらによれば、Tameghil の地はもともと荒地であり、人々はこの地で年中放牧をしており、この地にはレンガを積み上げた囲い（ホタン人は土レンガ造りの壁を Tam と呼ぶ）が作られた。後に人々がこの地に定住するようになり、Tameghil がその地名となった。[『ロブ県の歴史』：69]

「地を責めて天を責めない」というのがアブダル人の人生哲学である。数世紀にわたる閉ざされた生存状況にあって、近隣からの排除や蔑視に遭う中、アブダル人たちは独自の生活習慣や生活方式を形成していった。最も典型的な特徴は、彼らが生活に対する自信をみなぎらせ、郷土観念が希薄で、生命の尊さが郷土にも勝るという考えを持ち、自殺を忌むということである。居住地に不満を持つアブダル人らは、門の前にトウモロコシの茎を置いたり、棘のある植物を門の前に柵のように立てるなど、伝統的な不在のシグナルを残した上で異郷へ向かい、中には時が立てば戻ってくる者もいた。彼らは季節により外部へ生活の糧を求めに行った。

継承、割礼——預言者モーゼより始まったこの習慣は、『旧約聖書』を受け入れたユダヤ人たちの宗教的習慣となった。預言者ムハンマド以降、割礼はムスリムのスナティ (Sunati, 宗教的義務) となった。男子の包皮を切除することが、大多数のアブダル人男性の生業となった。彼らがこうした職業を持った背景には二つあり、一つは預言者ムハンマドがムスリムの義務としたためであり、もう一つは生計のためである。包皮を切除するのはムスリムの証であり、一般には男子が5歳ないし7歳の時に行われる。ウイグル族の男子の割礼は一般的にアブダル人が行うことになっており、現在では病院の外科でも施術が可能だが、農村では依然として伝統的な方法で包皮の切除が行われている。割礼の行われる時期は

春または秋で、ホタン地区のアブダル人は多く1～4月を選んで行っている。カシュガル地区のイエングサル、ヤルカント、メキト、カガルク、ポスカムなどの県も同様であるが、ベイジワト、イエニシェヘル、コナシェヘル、ヨブギタ、マラルベシなどのアブダル人らは秋を選んで割礼を行う。アブダル人がこの仕事のために外出する際には通常、7歳以上の息子を伴い、息子が親の仕事を継承できるよう教えることになっている。

包皮の切除に使用される道具は髭剃り用の刃物で、包皮切除のためだけに使用され、鋭利さを保つために常に研磨されている。このほか使用される道具は次のとおり。① Qomush Qisquch (竹製ピンセット)：直径1.5～2センチ、長さ15センチ程度。この道具の端に、20センチほどの紐を結びつける。② Oq：アズまたはタマリスクの木で作られ、長さ6センチ、Qomush Qisquchを開いて挿入し、包皮を挟み込んで抜き出すのに使用する。③ Pakhta (綿花)：開きたての綿花を用意し、火で焼き、綿花が半分まで焼けたタイミングで腕に受ける。回りに土を置き、腕の中の綿花の煙が外に漏れないようにする。この綿花は、止血に使用される。

包皮切除の手順は次のとおり。

割礼を受ける男子は、大小便を済ませた後、父親や叔父、父の友人などは男子の左右から離れてはならない。割礼師の準備が整うと、「慈悲深いアッラーの名において」と唱えながら包皮を切除し、焼いた綿の灰で包めば、割礼は終わりである。執刀に先立ち、まずは男子を安心させるために、「今年はやめた。来年になってから割礼をしよう。今日は竹で測ってみるだけだ」などと言い、男子の緊張を和らげる。男子が緊張の余り泣き出した場合は、ゆで卵を口の中に入れてやる。熟練した割礼師であれば、1～2分で施術を完了する。母親など女性が男子の泣き声聞くのは不吉とされるため、その場にいることはできない。切除された包皮は、壁の穴の中に入れられる。儀式に参加するためにやってきた親戚や友人らは、男子に贈り物をやる。主人(父親)は、割礼師に礼金と衣服、布地などの贈り物をする。施術が成功であれば、男子は1週間程度で完治し、1カ月後またはいくらか経った後で、家族で割礼の儀式を祝う。

乞食はアブダル人にとって、もう一つの伝統的な生業である。その起源については、今となっては考証するべくもない。他の乞食との違いは、アブダル人は通常決まった季節に外部で物乞いすることであり、夏・秋(夏、秋の収穫前)を選んで物乞いする。アブダル人は馬または馬車に乗って Kepsen (現地のウイグル人は夏、秋の収穫時、10～15キロの作物を Kepsen として残し、アブダル人らに布施として渡す。現地のウイグル族の農民らは、アブダル人はイスラム教の苦行僧 (Zahid) とみなし、毎年彼らに Kepsen を送り、善行を積むことで来年の豊作を期する)を受け取りに回る。もし Kepsen の量が少なければ、アブダル人は不満がる。そこで現地の人々は皮肉を込めて「アブダル人に Kepsen を残しておいても、彼らにお前の秤は正しいのかと問われる」というのである。また、アブダル人は Kepsen を受け取る時に、櫛や裁縫道具を携えて農民に売る。民間では「アブダル人で物乞いができ

ないとは、仕事ができないということ」とも言われ、物乞いのできない者は嫁の来手がなかった。アブダルの男子は、すべて物乞いをしなければならないが、時代の推移に伴い、アブダル人の一部は物乞いという職から離れ始めている。

アブダル人は、占いにも従事する。彼らは Kumchak（丸い小石）と呼ばれるものを使って占いをするほか、一部では手相や人相も占う。

薬草の取引も、アブダル人の職業で、これには医術も含まれる。脈を取って患者にさまざまな薬剤を処方するが、これは患者の「顔色」によって決める。薬草の取引はアブダル人の物乞い以外の職業の一つであるが、男子が物乞いに出かけているときは女性が代わりに薬草を取引する。男子が物乞いに出かける季節には、彼らはさまざまな野菜の種をウイグル族の農民に販売するが、この種は別の場所で卸売りされていたものである。一部の家庭ではこうした生業は昔から行われており、その仕事が家の綽名になっている。これはその子女にも受け継がれる。

#### IV アブダル人の風俗習慣

アブダル人は比較的閉ざされた生活をし、独特の習俗を持っている。一定の季節になると外へ物乞いに出かける。部族意識が強く、長老が誰であるかは外部には秘密になっており、結束力がとても強く、長老がすべてを掌握し、束縛を嫌う。外部の人が集落に入った場合は、アブダル人たちは隠れてしまう。このため、こうした集落の村長はアブダル人でなければならない。さもなければ就任したところで仕事にならない。

アブダル人は長老の意見に従い、大きな問題も小さな問題も長老に教えを請う。冠婚葬祭、遠方への外出、生計に関する交渉事などについては、必ず長老の同意を得なければならない。長老の怒りを買えば、多くのものから非難される。外部のものとの付き合いにおいては、秘密保持に注意し、長老の同意がなければ外部の人に情報を伝えてはならない。自殺を忌避し、人格の尊厳を集団で守り、特にアブダル人蔑視の言動に対しては集団で抗議する。耕作は得意ではなく、また好まない。近隣での互助が盛んである。外部の者には関心を持たない。

飲食習慣という面では、現地のウイグル族と何も特別な違いはない。ただし、国外のアブダル人と同じく、新疆のアブダル人も男女が同じテーブルで食事することをタブーとし、女性は厨房に隠れて食事をする。

アブダル人の婚礼の習俗は独特である。現地の他のウイグル人とは通婚せず、娘が別の環境で幸福に暮らせるかどうかはともかく、現地のある種の言葉が彼女たちの心を傷つけるのが必至だからという。筆者の見るところ、これは集団の血統の純潔を守るためだろう。

アブダル人の婚約をめぐる習慣は、現地の他のウイグル族とはやや異なる。新婦の経済状況にかかわらず、媒酌人が最初に見合い話を父母に持っていく時に携えるのはわずかなン4つだけである（他のウイグル族はたくさんの土産を持参するのが通例である）。婚礼の当日、

客人からの贈り物を受け取り、宴会が始まる。新郎新婦の対面では、他のウイグル人とは異なり、新婦に火を飛び越えさせる儀式を行わない。新婚初夜、新婦側の女性5～6人が新居に入るが、ウイグル族の間では泊まって新婦の処女を確かめる役目になっている新婦の実兄の嫁（Yenggisi）も、新居に残らず、やってきた女性たちとともに帰宅する。外部の者とは通婚しないが、外部のアブダル人は別である。アブダル人は女子の純潔を重んじ、婚礼の翌日に女子の純潔が証明され、処女であったことが分かれば、新郎側は満足のしるしとして新婦の父母に Komech を贈る。新婦が処女でなかった場合も、新郎側は Komech を作って新婦側に贈るが、中は空洞にし、新婦が処女でなかったことを告げるのである。宴席ではナグラ（太鼓）、スナイ（チャルメラ）を演奏し、さまざまな民謡を奏で、火の回りメシュレプ（Meshrep, 歌と踊りの会）を行う。アブダル人らはサファイ（Sapayi, 鼓）の演奏を好む。

アブダル人の葬式は、イスラム教の伝統に則って行われる。現地の他のウイグル人との違いとして、ホタンのアブダル人は子が親に先立った場合、イスラム教の教えに従って遺体を洗った後、男子の場合は父親が、女子は母親がその遺体をあらためたのち、初めて埋葬される。葬式を行った建物には1ヶ月間、見知らぬ男子を入れてはならない。葬式の間や服喪中色合いの派手な服を着てはならない。

アブダル人の服飾にも独自の特色がある。男子は長い Chekmen Chapan（膝までの長い上着）と呼ばれる衣服（または腿までの短い上着）を着て、外に物乞いへ出かけるときには Kula という高い帽子、Salwar Tumaq という毛皮の帽子、縞模様の Chekmen を着る。布地は現地特有のもので、Salwar Tumaq という帽子は、他のウイグル人の帽子よりひさしが広い。女性は長いスカートをはき、外側に上着を着て、頭には柄入りまたは白いスカーフをつける。白、赤といった明るい色が好まれる。以前、男子は長髪を好み、髭を生やし、若者も同様であるが、現在ではそうした状況もやや変わっている。時代の変化に伴い、その服飾も変化しており、若者の間ではモダンな服装が流行している。

[追記] 本稿を執筆するにあたっては、京都大学大学院文学研究科における筆者の受入教員、濱田正美教授より数多くのご教示をいただきました。トルコ語資料の収集に関しては、トルナ・エルトグルル氏にご協力いただきました。ここに記し、深甚なる謝意を表します。

## 参 考 文 献

- Tarama Sözlüğü* : *Tarama Sözlüğü*, 1 A-B, Türk Dil Kurumu Yayınları-Sayı, Ankara, 1963.  
*Tarihi Aminiye* : Molla Musa Sayrami, *Tarihi Aminiye*, Xinjiang Helq Neshiryati（新疆人民出版社, ウイグル語）1989年.  
*Tarihi Rashidi* : Mirza Muhammet Heyder, *Tarihi Rashidi*（中国語版）新疆人民出版社, 1985年.

- Türkçe Okyanus : Türkçe Okyanus*, 1-cilt, İstanbul.
- 『ウイグル語詳解詞典』(ウイグル語版) 新疆人民出版社, 1990年.
- 『ウイグルの歴史』(ウイグル語) 新疆人民出版社, 1990年.
- 『ロブ県の歴史』(ウイグル語) [現地政府(ロブ県)発行小冊子, 出版年未記載]
- 『トルコ語大辞典』: マフムド・カシュガリ 『トルコ語大辞典』(ウイグル語版) 新疆人民出版社, 1981年.
- Atif, Muhammet (1998) *Kashghar Tarihi*, İstanbul.
- Grenard, F. (1898) *Mission scientifique dans la Haute Asie 1890 – 1895, Deuxième partie, Le Turkestan et le Tibet, Étude Ethnographique et sociologique*, Leroux, Paris.
- Ladstätter, Ö & A. Tietze (1994) *Die Abdal (Aynu) in Xinjiang*, Österreichischen Akademie der Wissenschaften, Wien.
- Le Coq, Albert von (1912) *Die Abdal*. In: *Baessler-Archiv*, Band 2, Leipzig/Berlin.
- Momin Abdulla (ed.) (1989) *Türkçe-Uyghurce Lughet*, 民族出版社(北京).
- Osmanof, Mirsultan (1990) *Hazirqi Zaman Uyghur Tili Dialekteleri* (ウイグル語) 新疆青年出版社.
- Pelliot, P. (1907) *Les Abdal de Painap, JA, Dixieme serie, tom. 9*.
- Sherifjan Qasim (2005) ホタンのアブダル人及び言語 『和田専科学報』(ウイグル語版) 2005年第4号.
- Togan, A. Zeki Velidi (1947) *Bugünki Türkili (Türkistan) ve Yakın Tarihi*, 1-cilt, İstanbul.
- Valihanof, Choqan (2001) *Alte Sheher Haterisi* 『新疆地方志』(ウイグル語) 2001年第2期.
- アブレット・アッバス (1997) シェイフの部族起源の問題をめぐる研究 『新疆社会科学研究』(ウイグル語版) 1997年第3号.
- アリ・グブル (2006) 新疆阿布達里人淵源考 『西域研究』2006年第3期.
- 牛 汝極 (2003) 『阿勒泰文明与人文西域』(中国語版) 新疆大学出版社.
- 段 連勤 (1996) *Dinglinglar, Qangqilar ve Turalar* [丁零, 高車及び鉄勒] (ウイグル語版) 第一卷, 新疆人民出版社.
- 趙相如, ハーシム・トゥルディ (1982) 新疆艾努人的語言 『語言研究』(中国語版) 1982年第1号.
- 趙相如, ハーシム・トゥルディ (1985) 艾努語和艾努中的数詞 『新疆大学学报』(ウイグル語版) 1985年第1号.
- 林徹, サービト・ローズィー, ターヒルジャン, 王建新 (1999) 『謝依赫勒詞匯 (A Šäyxil Vocabulary: A Preliminary Report of Linguistic Research in Šäyxil Village, Southern Xinjiang)』京都大学文学部言語学研究室.
- ムテリッパ・スドゥク (1988) シェイフ人とパッチイム (patchiyim) マザール 『新疆師範大学学报』(ウイグル語版) 1988年第3号.

(著者: 新疆教育出版社)